



大学も個性を打ち出す時代。 偏差値やブランドで選んでいると、 入学後に後悔しますよ。



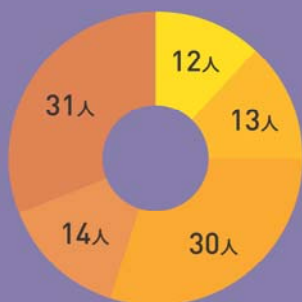
Profile

進路づくりの講師・
高大共創コーディネーター
倉部史記氏

日本大学理工学部建築学科卒業、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。企業広報のプロデューサー、私立大学専任職員、予備校の総合研究所主任研究員および大学連携プロデューサーなどを経て、現職。

さて、問題です!!

大学がもし100人の村だったら(全国の大学入学者を100人の村人に置き換えたら)、「大学を4年間で卒業して就職し、そこで3年以上働いている人」は下のグラフのどこに当たるでしょうか?



※山本繁「つまづかない大学選びのルール」(ディスカバー・トゥエンティワン)より

「大学を4年間で卒業して就職し、そこで3年以上働いている人」は100人中たった31人にすぎません。実は、100人のうち12人が中退し、13人が留年し、30人

が就職せず、14人が早期離職(3年以内に離職)しているのです。もちろんそのなかには海外留学やキャリアアップなどポジティブなケースもあるでしょうが、安易な気

大学で身につけた専門性と教養だけじゃ、
これからは食べていけないんです。



持ちや親の意思で大学に進学したり大学・学部を選んだりした結果、ミスマッチが起きているケースも少なくないと考えられます。特に中退者(大学・専門学校の中退者)については、約70%が非正規雇用、約15%が無職(※)という現実があり、社会に出てからも厳しい壁に直面することになりかねません。多様な大学が存在する今の時代は、

子ども自身が納得した進学先を選ぶことが、これまで以上に大切になります。そしてそのためには、大学の教育の自身をしっかりと理解することが不可欠なのです。
時代の変化に応じた価値を創造する力が求められる
昨今、大学の教育は、保護者の皆さんの時代とは大きく変わって

高い学費払って大学に行かせるのに、
食べていけない!?



※独立行政法人労働政策研究・研修機構「第3回若者のワークスタイル調査」



偏差値ってわかりやすいから
ラクなんだけどね...

**入試は大学と学生のマッチングの場。
偏差値ではなくポリシーに注目を!**



さらに、学ぶ内容も変化してきます。これからの時代に必要になる汎用基礎能力のうち、カギとなるのが「グローバル」です。国内外のどこにいようと多国籍の人とコミュニケーションをとりながら協働することになる今後は、英語が使えるかどうかで仕事の幅が変わってきます。ただし、英語ができる

る取組を展開しています。
身につけるべき汎用基礎能力は
グローバルとデータサイエンス



付箋を使いながら意見を出し合いまとめていく学生たち(産業能率大学)

ただでは不十分で、英語で何ができるかという「グローバル×専門」の能力が問われます。こうした社会のニーズを受け、グローバルな人材を育てる方向へと舵を切る大学が増えています。保護者世代には「海外留学や英語習得」文系の学生が中心」という印象があるかもしれませんが、今や文理関係なく、語学だけではない「グローバル」な視点や知見が求められているのです。図7に挙げた大学・学部は一例ですが、教育理念や実際のカリキュラムに「グローバル」の視点があるかどうかというのは、進学先選びの際にぜひ注目していただきたいポイントです。

2つ目のカギは、「データサイエンス」です。データを科学的に用いて社会に有益な知見を生み出すのがデータサイエンスで、医療分野で画像診断にAIを活用するなど、さまざまな分野と掛け合わせることで価値を生み出します。2017年度、日本で初となるデータサイエンス学部が滋賀大学に誕生しました。2018年度には横浜市

立大学に、2019年度には武蔵野大学にも設立され、人気を集めています。データサイエンスは、世界的に今、最も注目されている職業の一つですが、データサイエンスについて専門的に学ぶ道だけが選択肢ではありません。グローバルと同じく、これから求められるのは「データサイエンス×専門」の能力です。例えば富山大学では、2020年度から全学部の学生に、数理・データサイエンス教育を必修化します。既存の学問分野を学びつつ、汎用基礎能力の一つとしてデータサイエンスを学べる。そんな大学が今後ますます増えることが予想されます。

**偏差値・ブランドよりも
教育内容と相性を大切に**

これからの社会で重要になるであろう汎用基礎能力として、「グローバル」と「データサイエンス」を挙げましたが、大切なのは、偏差値やブランドではなく「どこで学べばわが子が最も伸びるか」という視点で大学を見ることがです。

そして、大学の教育内容や特長を知るために有効なのが、各大学が公表している3つのポリシー。どのような人材を育てることを目指しているかを記した「ディプロマ・ポリシー(DP)」、具体的にどのよ

うな教育を行っているかを記した「カリキュラム・ポリシー(CP)」、そして、どのような資質・能力を入学者に求めるかを記した「アドミッション・ポリシー(AP)」です。図8の例を見るとわかるように、同じ学部でも大学によって目指す方向やコンセプトは異なります。わかりやすい言葉では書かれていないケースも少なくありませんが、大学のホームページや学校案内を見て、親子で読み比べても良いか

図8 同じ学部名でもポリシーに大きな違いがあることも

	A大学 経営学部	B大学 経営学部
DP	●グローバルビジネスパーソンの育成	●難関資格の取得 ●就職率9割達成
CP	●企業と連携した実践的なプロジェクト授業の展開 ●海外留学の必修化 ●専門科目の2割を英語で開講	●資格対策講座、公務員対策講座の充実 ●地元企業へのインターンシップ充実 ●ICT教育の充実
AP	●グローバル教育への意欲や関心をもっていること(その確認のための面接や小論文を入学者選抜で義務化) ●外部英語試験の成績優秀者は一部試験免除	●バランスの良い基礎学力をもっていること ●指定校推薦枠の積極的活用

多様化が進む 大学の個別入試の例

【早稲田大学】

入学後の学びを見据え、
主体的な取組や経験を評価

2018年度より高校時代に取り組んだ地域課題に対する活動や大学で学びたいこと、将来のビジョンなどについての「課題レポート」を課す「新思考入試(地域連携型)」を一部の学部で実施。さらに、2021年度の一般選抜、大学入学共通テスト利用入試では、全学部においてWeb出願時に受験生が「主体性・多様性・協働性」に関する経験を記入することが要件に。また、統計学や数理的アプローチが必要になる政治経済学部では、2021年度入試より大学入学共通テストの「数学I・数学A」を必須受験科目とするなど、大学が求める人物像や入学後の学びの実態に即した入試内容へと変わってきている。

【お茶の水女子大学】

その場でレポートや実験を課す
実践的な入試で知識の応用力を問う

「新フンボルト入試」では、プレゼミナールで大学の授業を体験し、そのレポートと提出書類で1次選考を行う。2次選考では、文系は大学の附属図書館の文献や資料を使ってレポートを作成し(図書館入試)、理系は実験や課題研究発表を行う(実験室入試)。学力試験は行わず、グループ討論や面接の様子も含めて総合的に評価する。

【東北大学】

基礎学力を重視しつつ、
多様な視点で総合的に評価する

国立大学のなかでも早くからAO入試(総合型選抜)に力を入れ、2020年度は定員の25%をこの方式で募集。例えば農学部の面接試験では、実施前に課す小作文と出願書類を参考に、農学への関心度と知識、発想の柔軟性と豊かさ、表現力、行動力、協調性などを総合的に評価する。高い水準の学力が求められるのも特徴。

【九州産業大学】

高校と大学が連携した
育成型入試でミスマッチを防ぐ

高校生が大学の通常授業に参加して1日を過ごすWEEKDAY CAMPUS VISIT(またはWEBでの模擬講義)、受講後のレポート提出、専任スタッフによる面談などを出願前の育成プログラムで実施。面談では学びへの意欲や学部・学科とのマッチングを確認し、面談結果はスタッフから高校の先生にフィードバックされる。ミスマッチを解消したうえで育成型入試に出願できる仕組み。

もしれません。大切なのは、「自分は大学で何をどう学び、どうなりたいか」というわが子の希望と「大学のDP・CP」が近似した大学を選ぶこと。注目すべきは大学の偏差値ではなく、3つのポリシー、そして何よりわが子の意志なのです。
学力だけの合否判定は減少し、各大学が特色ある入試を実施

各大学のAPを具現化したものが、大学の個別入試です。大学の多様化に伴い、個別入試も多様化しています。まず、国公立大学も

含めてAO・推薦入試(2021年度からは総合型選抜・学校推薦型選抜に改称)による入学者の割合が年々増えています。その背景には、多様な人材を集めたいという大学の狙いがあり、入試の方式や問題からは大学の思惑が感じ取れます。また、AO・推薦入試のなかでも近年は、教授の講義を受けて皆で議論したり、資料を活用しながら複雑なテーマを論じたりと、大学での学びに適合するかを問う高大接続型入試を実施する大学も増えています。入試には合

↓ 保護者に求められること

否が付きものですが、受験生をふるい落とすためのものではなく、「こんな学生が欲しい」という大学・学部と「こんな大学・学部で学びたい」という受験生をマッチングするためののだという視点も忘れないでいただきたいと思います。

保護者の皆さんには、進路の「正解」を示す案内役ではなく、ぜひ「ツツコミ役」になってほしいと思います。進路を決める際には、「なぜ、

その学問・職業分野を学ぶのか」「なぜ、その学校なのか」「なぜ、そう考えるに至ったのか」の3つの「なぜ」に答えられるようになることが重要です。保護者からの「なんで？」というツツコミが、子どもが3つの「なぜ」について考えるきっかけになるのです。

親の希望の押しつけは厳禁ですよ!

